

ワクワクは大事かも

東京大学大学院知能機械情報学専攻
趙 炳郁

この春、博士課程の卒業で大学、大学院の9年間の学生生活が終わり、今度は教員としての生活が始まった。私の日本留学生活の振り返りと、せいぜい2ヶ月ほどしか経っていないが、教員として感じたことを書いてみようと思う。

普通、子供の頃、ロボットが登場する漫画を見ると男の子はワクワクする感情に包まれ、部屋で大騒ぎするものだ。私も同じで、10歳頃ガンダムという漫画を初めて見て、似たような感情を持った記憶がある。10年くらい経って高校生になった時にも、精神的に成長できておらず、まだロボットを見るとワクワクしたが、当時は少し違って、勉強を頑張る良い大学に行けば、いつかあんなロボットを作れるだろうという期待感でそのような気持ちになったと思う。

高校卒業後1年間浪人して、2012年にやっと希望の大学の希望の学科に入学することになったが、実際に大学に行ってみると、私が考えていた学問と私の適性が少し違っていたようで、実習や実験の時間は、もっと知りたいという思いより、面倒くさいと思うことの方が多かった。そのため、学部時代は新しいことをすることに対して、ワクワクすることより義務感でやることが多く、大学院への進学は決まったものの将来に対する確信がなかったため、まず軍隊に行くことにした。

軍隊生活は大学生活よりもさらに退屈な義務感しかない生活だった。毎年決まった行事があり、マニュアルがあり、新しいことをするよりも現状を維持することが重要な集団なので、私のように思い通りに動きたい人が生活するには満足できない場所だったけれど、いろいろな面で学ぶことは多かった。

無事に兵役を終え、2018年度から大学院生活を始めた。不思議なことに、学部4年生の時にも研究したことがあるのに、今回は当時と違って自分が主体的に研究をすることになったからか、高校や子供の頃に感じたワクワクするような感情を8年ぶりに感じた。私が現在研究している分野は細胞に関するもので、予測される結果がわかりにくいからかもしれないが、結果的に私は研究というものに興味を持つようになり、そのまま博士課程に進学することにした。博士課程に進んだ後は、思ったより楽しく研究を行うことができた。もちろん、帰宅時間はいつも深夜で、審査を準備する最後の半年は文章で表現できないほど大変だったが、いつも私の意見を尊重して指導してくれた指導教員のおかげで無事に卒業することができた。

今は同じ研究室で助教として学生の研究指導をしており、学生の頃とは比べ物にならないほど義務と責任が増え、研究に対してワクワクする機会が少なくなった。しかし、皮肉なことに、学生の研究指導の際、うちの研究室のボスはいつも「研究は常にワクワクする気持ちでやるものだ」という持論をお持ちで、今はどうやって人をワクワクさせるかを常に考えながら日々を過ごしている。最近、初めてオムニバス式の大学院の授業を行う機会を得て、先週授業を終えてきたところだ。理論の説明1時間と簡

単な実験 30 分程度の授業だったが、やはり過去の学者が見つけた真理を面白く伝えるのは難しかった。それでも実験では「これワクワクするね！」と言ってくれた学生がいて、少し嬉しかった。それが最近のワクワクのポイントであり、しばらくの間は現状を楽しみたいと思う。